様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１７日現在

機関番号：11301
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22520488
研究課題名（和文）　省略現象に関する統語論・意味論のインターフェース研究

研究課題名（英文）　A Study on the Interface between Syntax and Semantics on Ellpisis

研究代表者
島　越郎（Etsuro SHIMA）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50302063

研究成果の概要（和文）：
省略文とは同一の文脈中に言語的に顕在化した先行詞を必要とする言語表現であるが、この様な表現の特徴を捉えるためには、省略された箇所の意味がどのようにして先行詞から復元されるのかを明らかにしなければならない。本研究は、英語に見られる様々な省略文の特徴を考察し、省略文の派生には、音韻部門における削除操作による派生と意味部門におけるコピー操作による派生があることを明らかにした。また、これら２つの派生以外に、省略箇所に発音されない代用表現を含む省略文も存在することを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
Ellipsis is an instance of anaphora in which a missing expression is able to find an antecedent in the surrounding discourse.　I have considered how the meaning of the ellipsis is recovered from its antecedent by investigating various kinds of ellipsis in English.　My research has revealed that ellipsis is derived from the deletion operation at the phonological component or the copy operation at the semantic component.　I have also argued that there are ellipsis sites that hold unpronounced pro-form.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：省略　削除　コピー　同一性条件　再分析

１．研究開始当初の背景

省略文と代名詞は必ず先行詞を必要とする照応表現であるが、両者には重要な相違点が存在することを Hankamer and Sag [“Deep and Surface Anaphora,” *Linguistic Inquiry* 7, 391-426, 1976]が指摘している。彼らの研究は、省略文一般に見られる特性を明らかにした点において、画期的な研究であった。しかしながら、その後の研究において、個別の省略文が示す固有の特性も数多く指摘されてきた。この様な研究状況を踏まえ、本研究は、省略文が示す一般的特性と個別的特性を統一的に説明できる体系的理論の構築を目指した。

２．研究の目的

(1) 省略文が生起する統語環境

省略文が生起する統語環境は一様ではなく、生起できる環境はそれぞれ異なる。各省略文がどのような統語環境に生起でき、また、できないのかを明らかにした上で、省略文の生じる統語環境について説明する。

(2) 省略箇所と先行詞との構造関係

それぞれの省略文とその先行詞との関係には一定の制限が見られる。各省略文における省略箇所とその先行詞にはどのような構造関係にあるのかを明らかにし、何故そのような構造関係が成立するのかを説明する。

(3) 省略箇所と先行詞との同一性条件

省略された箇所とその先行詞は意味的に同一でなければならないが、形に関する同一性の程度は各省略文により異なる。それぞれの省略文にはどのような同一性条件が適用されるのかを明らかにし、何故そのような同一性条件が要求されるのかを説明する。

３．研究の方法

本研究で取り扱った省略文は、次である。

(1) 間接疑問縮約 (Sluicing)

Bill is writing, but you can’t imagine where.

(2) 動詞句削除 (VP-ellipsis)

John ate an apple, and Mary did too.

(3) 擬似空所化 (Pseudogapping)

John ate an apple, but he did not an orange.

(4) 空所化 (Gapping)

John ate an apple and Mary an oragne.

間接疑問縮約(1)では、疑問詞 where の後に Bill is writing が省略されている。(2)の動詞句削除では、助動詞 did の後に eat an apple が省略されている。(3)の擬似空所化では、助動詞要素 did not と目的語 an oragne の間に eat が省略されている。(4)の空所化では、主語 Mary と目的語 an oragne の間に動詞 ate が省略されている。これらの省略文に見られる特徴を、上記の 3 つの研究目的の観点から考察することにより、省略文が示す一般的特性と個別的特性について研究を行った。

４．研究成果

(1) 省略文の派生

Chomsky (2000, 2001)により提案されたフェーズ理論の下、音声解釈部門である PF において適用される削除操作を誘発する素性と意味解釈部門である LF において適用されるコピー操作を誘発する素性がフェーズである CP と vP 主要部に随意的に基底生成されると仮定し、間接疑問縮約(Sluicing)は CP 主要部に基底生成されたコピー素性により派生し、空所化と擬似空所化は vP 主要部に基底生成されたコピー素性により派生し、動詞句削除は vP 主要部に基底生成された削除素性

により派生することを。また、この提案の帰結として、次の現象に対して統一的説明を与えることを試みた。

①動詞句削除文は不定詞節内に生起できるが、擬似空所化文は生起できない。

②動詞句削除文の先行詞は一つの構成素を形成しない複数の分離先行詞になり得るが、擬似空所化文と空所化文は分離先行詞を許さない。

③空所化文の主語は先行詞文中の主語に束縛されるが、擬似空所化文の主語は束縛されない。

④動詞句削除文と擬似空所化文では先行詞文中の否定極性表現を肯定極性表現として解釈できるが、空所化では解釈できない。

(2)省略文の同一性条件

省略文に課せられる同一性条件として、i)音声解釈部門である PF において適用される削除操作に課せられる同一性条件と、ii) 意味解釈部門である LF において適用される焦点(Focus)の認可に基づく意味条件が省略文に課せられる同一性条件が必要であることを提案し、次の現象に対して統一的説明を与えることを試みた。

①動詞句省略の中に間接疑問縮約が適用される省略文が存在する。

②先行詞内に潜在項が含まれる環境において間接疑問縮約文は許されるが、動詞句省略文が許されない。

③先行詞内の不定代名詞に対応する要素として間接疑問縮約文の疑問詞は残留要素として生起できるが、動詞句省略文の疑問詞 は生起できない。

(3) 省略文における再分析

省略文が LF コピーと PF 削除以外の方法によって派生される可能性を考察した。具体的には、コピーされた要素が生起する空所スロットが、統語部門において発音されない代用形に再分析されることを提案した。この提案によると、動詞句削除の派生には PF 削除による派生と代用形による派生が存在し、空所化の派生には LF コピーによる派生と代用形による派生が存在する。また、この提案の帰結として、次の現象に対して統一的説明を与えることを試みた。

①文脈を整えることにより、複文を先行詞とする空所化が許される。

②場面設定の副詞句を残留要素とする空所化文が存在する。

③先行詞内に否定辞を含む空所化文は多義的解釈を許す。

④随伴現象を含む先行詞内動詞句削除が存在する。

⑤先行詞内に照応形を含む動詞句削除文が従属節に生起する場合、スロッピーの解釈を許す。

⑥動詞句省略を内部に含む動詞句省略がスロッピーの解釈を許す。

以上が主な研究成果であるが、本研究の大きな特徴は、様々な省略文が示す異なる現象を体系的に説明しようとしている点にある。動詞句削除をはじめとする個別の省略文、または幾つかの省略文に関する研究は数多いが、様々な省略文を統一的に取り扱った研究は殆ど存在しないように思える。今後は、日本語を始めとする英語以外の言語に見られる省略文も考察することにより、省略文の一般的特性と個別的特性に関するより体系的な理論の構築を目指す予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①島　越郎、「省略文に課せられる同一性の問題」、査読無、『東北大学文学研究科研究年報』第 62 号、2013、61-89.

②島　越郎、「フェイズに基づく LF コピーと PF 削除：動詞句削除、擬似空所化、空所化の違いについて」、査読無、『東北大学文学研究科研究年報』第 61 号、2012、41-61.

③島　越郎、「削除現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性：削除現象から考える文の左方周縁部」、査読無、『日本英文学会第 83 回大会 Proceedings』、2011、150-152.

④島　越郎、「省略文における再分析」、査読無、『東北大学文学研究科研究年報』第 60 号、2010、61-90.

〔学会発表〕（計１件）

①島　越郎、「削除現象を巡る機能範疇の統語特性と解釈特性：削除現象から考える文の左方周縁部」、日本英文学会第 83 回大会、2011 年 5 月 22 日、北九州市立大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者

島　越郎（SHIMA ETSURO）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50302063

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：